第４節　本遺跡検出の柄鏡形敷石住居について

本遺跡からは柄鏡形敷石住居が２軒検出された。ここでは本遺跡検出の柄鏡形敷石住居について周辺遺跡の事例との比較を交えながら若干の考察を加えたい。

１　柄鏡形敷石住居について

まず始めに柄鏡形敷石住居について簡単に確認しておく。柄鏡形敷石住居は、中部山岳地方、神奈川県、東京都多摩丘陵部、そして静岡県東部・伊豆地方に位置する中期後半から後期中葉の遺跡において多くの検出事例が報告されている遺構である。過去に実施されてきたこれらの遺跡の調査成果から、敷石住居は幾つかの共通した特徴を持つことが確認されている。

石柱・石壇の検出、石囲炉の検出、埋甕の検出、石棒の出土、壁に沿った小穴（壁柱穴）の検出、張出部と竪穴部の接続部分における二基の柱穴（「対ピット」）の検出、「火入れ」の儀式と推定される痕跡（敷石が火を受けて赤化する）などである。

柄鏡形敷石住居の変遷については、「敷石の風習」と「張出部の構築」という個別に成立、発展した要素が融合し柄鏡形敷石住居が成立したとの指摘がある（山本2002）。具体的に述べると、「敷石の風習」は、縄文時代中期後半に中部山岳地方で増加した石柱・石壇を伴った住居が、その祭祀の場を拡大し床面の「敷石」に発展したとされる。また「張出部の構築」については、中部山岳地帯および関東の丘陵地において、埋甕を埋設した付近の壁を外側に突出させた小型の張出部が拡大し「柄鏡の形態」に発展したとされる。

柄鏡形敷石住居は、「初源期（中期後半）」「成立期（中期後半から後期初頭）」「発展期（後期前葉）」「終末期（後期中葉）」の段階を経て消長したと考えられている（神奈川県立埋蔵文化財センター1996）。具体的な構造上の特徴は以下の通りである。石柱・石壇をもつ住居や小張出をもつ住居の段階が「初源期」である。壁際に多数の柱穴を巡らし（壁柱穴型）、炉を出入り口寄りに設け、埋甕の大半は張出部に設置されている段階が「成立期」である。張出部の「ひげ状」「凸状」への変化、埋甕の埋設行為の減少、竪穴周辺を敷石で覆う「周堤礫」の構築、方形の住居の増加が認められる段階が「発展期」である。さらなる方形の住居の割合の増加、環礫方形配石遺構の増加、敷石を持たない柄鏡形住居が増加する段階が「終末期」である（神奈川県立埋蔵文化財センター1996）。

２　１号住居と２号住居の比較

ここでは１号住居と２号住居の共通点と相違点を確認しておきたい。

１号住居は残存状態が良好でなく、張出部のほとんどが調査区外に延びることもあり、その全容を確認することは出来ていない。しかし１号住居と２号住居で幾つかの共通点を確認することが出来た。

石囲炉が検出されたこと、炉の覆土に多量の焼土や炭化物が含まれていたこと、石棒が出土したこと、「対ピット」が検出されたこと、敷石が受熱の影響により赤化していたこと、周堤礫を伴う可能性があること、加曽利Ｅ４式土器が主体的に出土したことである。

しかし一方で、敷石の付設形態、石囲炉の炉石の形態、張出部の規模(幅)、張出部の主軸方向、主体部と張出部の接合の造作、埋甕の有無、加曽利式土器の出土割合において相違が認められた。特に張出部の敷石の付設形態には大きな相違が認められた。１号住居は主体部と張出部の接合部分に板状の礫を差し込むように配しており、主体部と張出部の境界を意識的に表現しているかのような造作が認められた。また石材も小型の礫が使用されていた。一方２号住居は主体部と張出部の接合部に大型の自然礫を使用し、その隙間に小型の礫を充填するような造作が認められた。使用されていた石材については、１

号住居では角礫が多く使用されていたのに対して、２号住居には丸礫が多く使用されているという相違も認められた。

加曽利Ｅ４式土器の出土比率にも差異が認められた。１号住居は加曽利Ｅ４式土器が占める割合が約31パーセントであったのに対して、２号住居では約62パーセントであった。

以上のように１号住居と２号住居において見られた共通点と相違点について考えると、双方において敷石住居で多く報告されている共通点が確認されたものの、同一の遺跡に内において検出された住居としては、相違点が多く認められると言えるであろう。

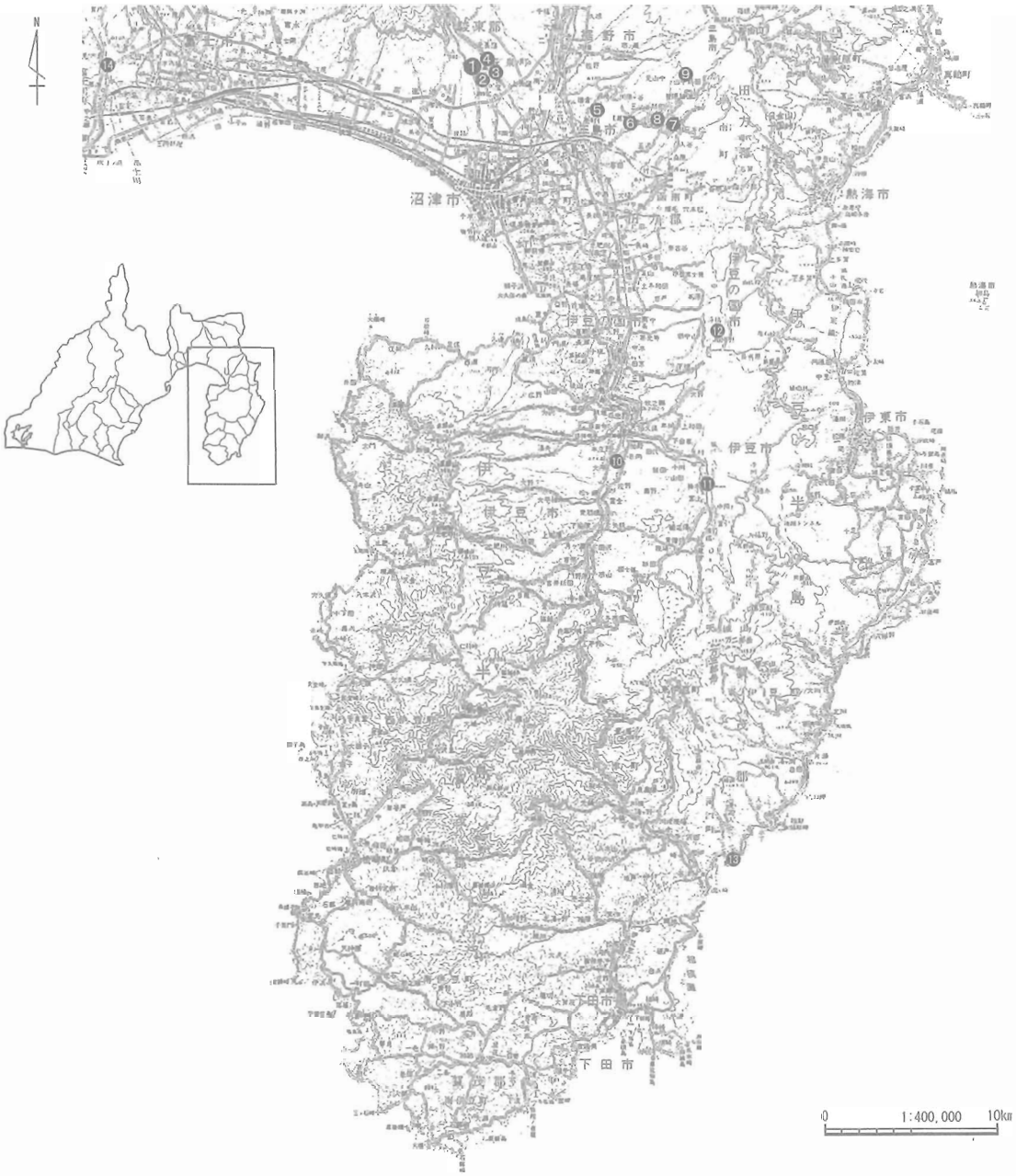
3　周辺遺跡の事例

本遺跡の周辺の遺跡で検出された敷石住居を以下の表にまとめた。

第48表　静岡県東部の敷石住居検出遺跡

番号	遺跡名	所在地	遺構名	形態	敷石の範囲	埋甕	石棒	石囲炉	時期	備考	報告書
1	丸尾北遺跡	沼津市	１号住居	柄鏡形	周堤	○	○	○	曽利Ｖ式・加曽利Ｅ４式	対ピット	本書
			２号住居	柄鏡形	周堤？	×	○	○	曽利Ｖ式・加曽利Ｅ４式	壁柱穴　対ピット	
2	大谷津遺跡			柄鏡形		×	×	○	加曽利Ｅ４式併行		『子ノ神・大谷津・山崎Ⅱ・丸尾Ⅱ』1985
3	鉄平遺跡	長泉町	１号住居	柄鏡形	一部のみ検出	○	×	○	中期後半	側壁溝	『鉄平遺跡』2003
4	桜畑上遺跡		住居	柄鏡形	全面	○	○	○	曽利Ｖ式併行		資料整理中
5	千枚原遺跡	三島市		方形	南半中心	不明	不明	○	加曽利Ｅ式		『千枚原遺跡』1968
			Ｂ１号住居址	柄鏡形	ほぼ全面	不明	不明	×	加曽利Ｂ式		
			Ｂ２号住居址	柄鏡形	ほぼ全面	不明	不明	×	加曽利Ｂ式		
6	十石洞遺跡		第１号住居址	円形	炉周辺	×	○	○	加曽利Ｅ４式併行		『十石洞遺跡』1990
7	押出シ遺跡		ＳＢ－10	隅丸方形	扁平の石３枚	×	×	×	中期後半	敷石住居の可能性のある住居	『押出シ遺跡（遺構編）』1999
			ＳＢ－34	隅丸方形	周堤？	×	×	○	中期後半	側壁溝	
8	北山遺跡		第15号住居址	円形	ほぼ全面				堀之内Ⅱ式	壁柱穴	『北山遺跡』1986・1988
			第５住居	不明	入口部	×	○	×	加曽利Ｂ１		
			第12号住居	不明	入口部	×	○	×	加曽利Ｂ１		
9	観音洞Ｂ遺跡		第３号住居址	不正円形	石壇を伴う住居	×	×	○	加曽利Ｅ３式併行	石壇・石柱を伴う	『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡』1994
10	大塚遺跡	伊豆市	３号住居址	柄鏡形	周堤と炉周辺	×	○	○	千居Ⅲ式・加曽利Ｅ４式	側壁溝	『修善寺大塚遺跡』1982
			４号住居址	柄鏡形	周堤？	×	○	○	千居Ⅱ式		
			５号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	加曽利Ｅ４式	４号住居に切られる	
			９号住居址	うちわ形	縁石部　張出部	○	○	○	堀之内Ⅱ式	配石囲縁竪穴家屋址	
			13号住居址	柄鏡形	周堤	×	○	○	堀之内Ⅰ式		
			14号住居址	柄鏡形	周堤と炉周辺	×	○	○	堀之内Ⅰ式	配石囲縁竪穴家屋址	
			17号住居址	柄鏡形	不明	×	×	○	堀之内Ⅰ式	配石囲縁竪穴家屋址により破壊	
			18号住居址	不明	不明	不明	不明	不明	中期	配石囲縁竪穴家屋址により破壊	
			19号住居址	柄鏡形	周堤？	×	○	○	中期末. 堀之内Ⅰ式	配石囲縁竪穴家屋址により破壊	
11	原畑遺跡	中伊豆町	１号住居	楕円形	周堤？	×	×	×	堀之内Ⅱ式前半段階	４号住居と重複	『原畑遺跡（遺構編）』2003
			２号住居	楕円形	不明	×	×	不明	堀之内Ⅱ式前半段階	内部に弧状の石が分布	
			３号住居	柄鏡形	全面	×	×	○	堀之内Ⅱ式後半段階		
			４号住居	柄鏡形？	周堤？	×	×	×	堀之内Ⅰ式中段階	１号住居と重複	
			５号住居	柄鏡形	周堤	×	○	○	堀之内Ⅰ式段階		
			６号住居	柄鏡形	全面？	×	×	○	加曽利Ｅ４式		
			７号住居	柄鏡形	全面？	×	×	○	加曽利Ｅ４式		
			８号住居	柄鏡形	周堤？	×	×	○	堀之内Ⅰ式後半段階		
			９号住居	不明	不明	×	×	○	加曽利Ｅ４式		
12	上西ノ窪Ａ遺跡	伊豆の国市	２号住居	不明	不明	○	×	○	堀之内１式	敷石住居？	『笹子遺跡・上西ノ窪遺跡』1997
			７号住居	柄鏡形？	一部のみ残存	○	○	×	曽利Ⅳ・Ⅴ式　加曽利Ｅ４式		
			８号住居	柄鏡形	一部のみ残存	○	×	○	曽利Ⅳ式・加曽利Ｅ４式		
			９号住居	柄鏡形	一部のみ残存	×	○	○	堀之内式	壁柱穴？　10号住居と重複	
			10号住居	柄鏡形	一部のみ残存	×	×	不明	堀之内式	壁柱穴	
			11号住居	柄鏡形	一部のみ残存	×	×	○	堀之内式	壁柱穴	
13	見高段間遺跡	川津町	第１号址	柄鏡形	全面	×	○	○	加曽利ＥⅡ式		『見高段間遺跡　第二次調査報告書』1972
14	破魔射場遺跡	富士市	ＳＢ－25	柄鏡形	周堤？	×	×	○	堀之内1式		『富士川ＳＡ関連遺跡』2001

註　遺構名・土器型式の表記方法については各報告書に準じている



第140図　静岡県東部における敷石住居検出遺跡分布図

4　丸尾北遺跡の柄鏡形敷石住居について

最後に先行研究により提唱されている敷石住居の変遷観に照らし併せ、周辺遺跡の事例も踏まえて、本遺跡で検出された柄鏡形敷石住居についてまとめたい。上述したように柄鏡形敷石住居の変遷については、石柱、石壇がその範囲を拡大し屋内敷石の風習へと発展し、埋甕を伴う小張出部から発展した柄鏡形住居と融合して柄鏡形敷石住居を成立させたとする指摘がある（山本2002）。

周辺の遺跡では、石柱、石壇を伴う敷石住居は、三島市観音洞Ｂ遺跡検出の加曽利Ｅ３式段階の住居が唯一の検出例として挙げられる。これは周辺遺跡の敷石住居の中では古い時期のものであると同時に、柄鏡形を呈しておらず、不整な円形を呈する住居であり、上述の変遷に合致した様相を示している。

観音洞Ｂ遺跡検出の事例を除けば、本遺跡周辺の敷石住居の時期は加曽利Ｅ４式から堀之内Ⅱ式の範疇に収まるものが主体である。しかし同時期に構築されたとは言え、他の遺跡で検出された敷石住居の

敷石の敷設形態は多様であり、本遺跡の柄鏡形敷石住居と酷似するは認められない。しかしその形態は敷石が全面に施される形態、竪穴周縁に施される形態、炉周辺に施される形態に大別することができ、さらに張出部を持つものと持たないものに分けられるようである。

敷石の形態、石囲炉などの付帯施設、出土遺物の関係（遺構の時期）を見てみると、全面に敷石が施される形態は後期の住居で比較的多く認められていることが分かる。石囲炉については中期後半（加曽利Ｅ４）から後期初頭（堀之内Ｉ式）の住居に伴うことが多く、堀之内Ⅱ式以降での検出事例が少ない。

また埋甕については全体的に検出事例が少ないという傾向があり、特に堀之内式期以降で検出例が少ない(註１)。石棒の出土については時期的な偏りは見受けらないが、石囲炉を伴う住居で多く検出される事例が多い傾向がある。埋甕、石棒に関しては、時期差よりも地域差が反映されているようである。

本遺跡の柄鏡形敷石住居と周辺の事例を、先に挙げた「初源期（中期後半）」「成立期（中期後半から後期初頭）」「発展期（後期前葉）」「終末期（後期中葉）」という変遷観に当てはめるならば、上述したように三島市観音洞Ｂ遺跡で検出された敷石住居が唯一「初源期」の要素をもっていると言える。その他の遺跡で検出された敷石住居は、「成立期」と「発展期」の要素をもっている。これを地域に分けて概観すると、本遺跡が立地する静岡県東部の遺跡では「成立期」の敷石住居が多いのに対し、伊豆地域では「発展期」のものが多いと言うことができるであろう。

本遺跡の柄鏡形敷石住居については、出土土器、炉の形態など「成立期」に該当する要素を多く持っている。しかし「発展期」の要素である「周堤礫」をもつ可能性があることなどを踏まえると、「成立期」から「発展期」の過渡的な時期に位置づけられる柄鏡形敷石住居と言うことができるであろう。

註

1　埋甕の風習自体の時期に関わる問題でもあるが確認のために記載することとした。